

サントリーホールディングス株式会社

2018年12月期中間決算 説明内容

説明者：サントリーホールディングス株式会社
取締役専務執行役員 肥塚眞一郎

平素から私どもの活動に対して多大なご支援を賜り、心より御礼申し上げます。
決算をご説明する前に、先日の大阪北部地震、また、西日本を中心とした「平成30年7月豪雨」により、被害にあわれた方々に、心よりお見舞い申し上げます。

①当期業績について

当社は、今年2月発表の2017年12月期決算から、国際会計基準（IFRS）を採用しており、今回もIFRSでの報告とさせていただきます。

2018年度中間期、サントリーグループの業績は、
酒税を除いた売上収益が、1兆652億円、前年同期比103.7%、
酒税込みの売上収益が、1兆1,894億円、前年同期比103.3%となりました。
営業利益は、1,231億円、前年同期比105.0%
親会社の所有者に帰属する中間利益は、748億円、前年同期比136.9%となり、
増収増益で上半期を終えることができました。

②事業の動向について

次に主要なセグメントについて簡単にご説明します。

<飲料・食品セグメント>

売上収益は、6,102億円、前年同期比103.9%、
営業利益は、665億円、前年同期比103.7%となりました。

昨日、サントリー食品インターナショナル社が発表しました通り、「天然水」や「BOSS」を中心に、ブランド強化や新規需要の創造に取り組みました。また、タイにおいて、ペプシコとの合弁会社が事業を開始し、アジアにおける事業基盤が拡充しました。海外の加工食品事業の一部売却による利益もあり、増収増益となりました。

<酒類セグメント>

酒税を除いた売上収益は、3,491億円、前年同期比103.8%
酒税込みの売上収益は、4,733億円 前年同期比102.9%
営業利益は、624億円、前年同期比109.7%となりました。

ビームサントリー社は、事業が好調に推移し、為替影響や特殊要因を除いた既存事業ベースの売上収益が一桁台半ばの増となりました。

グローバルでは、ウイスキーの「ジムビーム」や「メーカーズマーク」、テキーラの「オルネートス」、コニャックの「クルボアジェ」などが好調でした。「ジムビーム」、「メーカーズマーク」のように世界的に展開しているブランドに加え、現地の消費者ニーズをとらえたブランドの育成も進めました。また、昨年発売したジャパニーズクラフトジン「ROKU」は、今年に入り、英国やフランス、中国などでの販売を開始し、展開国は日本を含め10カ国以上となりました。販売数量も、上半期で、既に昨年実績の2倍を超えました。「ROKU」は日米共同で開発した商品であり、このようなプレミアム商品を、ゼロから立ち上げることができたことは、統合の成果と考えています。今後もお互いの知見を持ち寄り、こうした商品開発力の向上に努めてまいります。

日本では、ウイスキーの戦略ブランドである「角瓶」、「ジムビーム」、「トリス」、「メーカーズマーク」のほか、RTDの主力商品「-196°Cストロングゼロ」も好調に推移しました。

次に、サントリービール社です。国内のビール類総市場は、前年同期比96%程度と厳しさが続いています。当社の販売数量は、ほぼ前年同期並となりました。「ザ・プレミアム・モルツ」ブランドは、料飲店様やご家庭で、きめ細やかな泡を体験いただく「神泡プロモーション」が高い評価をいただいております。また新ジャンルの販売数量は、高アルコール新ジャンル「頂」ブランドが寄与し、過去最高を更新しました。結果、ビール類のシェアは、上半期として過去最高(16.3%)となりました。「オールフリー」は、今年2月にリニューアルしました。「気持ちの良い軽快なのどごし」を実現した中味、パッケージ、コミュニケーションを刷新することで、お客様の層を広げることができました。また新たな飲用シーンへの拡大をめざし、6月にペットボトル入りの透明な新商品「オールフリー オールタイム」を発売しました。

最後に、サントリーワインインターナショナル社です。国産ぶどう100%ワイン“日本ワイン”は、販売数量が前年同期比2割増と好調に推移しました。

また「登美 赤 2013」が国際ワインコンクール「インターナショナル・ワイン・チャレンジ」で日本ワイン(赤)部門の最高賞である「トロフィー」を受賞するなど、国内外で高い評価を獲得しています。

③2018年の見通しについて

今年2月に発表した業績予想から変更はございません。

2018年12月期の業績は、
酒税を除いた売上収益は、2兆2,350億円、前年同期比103.6%、
酒税込みの売上収益は、2兆5,000億円、前年同期比103.3%、
営業利益は、2,640億円、前年同期比104.1%を計画しています。

上半期を終え、全体としては、ほぼ想定どおりの進捗です。しかし、事業の多くは夏および年末が大きな需要期であり、また、国内外の主要市場での競合激化や、先行き不透明な経済の状況も見込まれます。こうした中、私どもは、製品品質および飲用時品質に磨きをかけ、人材投資、研究開発投資、設備投資、そしてブランド強化のためのマーケティング投資を継続しながら、さらなる成長を目指して、一層努力してまいります。

なお、親会社の所有者に帰属する当期利益は、1,260億円、前年同期比 59.6%を見込んでおりますが、これは前期に米国での法人税引き下げに伴う繰り延べ税金負債の取り崩しが大きく利益を押し上げており、その反動によるものです。その要因を除くと、100億円程度の増益となる見込みです。

以上、私からの説明とさせていただきます。

今後とも、ご指導、ご支援をよろしくお願いいたします。

以上